記事内容は執筆者個人の見解であり、すべての方への有効性は保証できません。

ほりジイ
WRITTEN by S.HORIKIRI SINCE 1979.9.19 BAPPUJIYON

スクールソーシャルワーカーだより　77

長崎県立冨江高校
佐賀市立金泉中学校
荒れた学校の取組み

出番・役割・承認

私は、安全は体の問題、安心は心の問題であり、「安全がなければ安心もない」と考えています。

地球の至る所に 80 億もの人々が住んでいます。動植物は環境に合わせて生きますが、人は環境を作り変え、衣食住を整えて、安全安心に暮らせるからでしょう。

不登校の子について、入浴や着替え、食事内容、部屋のようす、トイレと睡眠のサイクルについて、気になるのも、この安全安心に関わるからです。

☆

以前、「子どものほめ方が自己肯定感を育てる。子どもをほめず、子どもがした内容をほめて」、と書きました。自分を大事に思う「自己肯定感」と自分は人の役に立つ存在だと感じる「自己有用感」も、安全と安心の関係と同様、切り離せない関係にあります。

★

40 年前、荒れた高校で経験した再生は、最初に教職員が一丸となり、次に全校を一丸にするための活動を設ける事によって成し遂げられました。

たとえば、生徒会「２１世紀委員会」の通学路空き缶拾いが全校行事に進化し、小中学校にも波及し、ついには青年会議所による町全体の行事となったのですが、町民の高校を見る目が変わり、地元中学生からの進学が増えました。

この時、荒れている生徒、活動の中心となる生徒、そのどちらも、心に満たされない何かを持ち、それをぶつけて人を困らせるか、人助けするかの違いだけなのだと気づきました。

当時、学校に不登校という概念はなく、カウンセラーも居ませんでした。そのような時代ですから「周りを困らせる生徒は、その子自身が困っている」という見方はありませんでした。

しかしこの高校は、問題を起こした生徒の家庭謹慎を、すべて学校謹慎とし、なかば無理やり、奉仕活動やボランティア活動を手伝わせました。

たとえば T 君と K 君は原付無免許二人乗りで、移動スーパーのバスにぶつかりました。謹慎で、ボランティア部の保育園訪問を手伝いました。

二人を怖がらない園児と遊ぶ事で、謹慎が解除になる頃は、学校でも怖くない顔に変わりました。

そして今、K は地元の建築会社の役員となり、T は県庁職員となって、それぞれボランティア活動に関わっているようです。

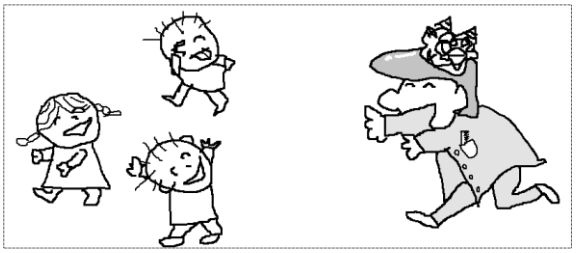
他方、15 年ほど前の佐賀・金泉中も荒れていました。

それが「出番・役割・承認」の生徒指導法で再生します。地域と連携して生徒の自己有用感を育て、結果として学校の活気が戻ったのでした。

★☆

どちらも、自分が誰かの役に立つ存在である事を実感し、新しい生き方が育った結果として学校全体が変わったと言えます。

周りのおとなが、子どもはきっと良くなると信じて機会を与え続け、行動を正当に評価する事で、知らぬ間に子どもは、自分を見つめる機会を得たのだと思います。

問題を起こした子を叱り、指導するのは簡単です。しかし、気づかなければ、子どもは同じ失敗をくり返します。

問題を抱えている子を導くことも必要ですが、視点を変えて、あなたが喜ぶような活躍の機会を作ってあげてみてはいかがでしょうか。